

中動態の世界

永田円了



The Middle Voice

私たちの生活は、何かをする、また人から何かをされる、ことによって成り立っている。これは、英文法では、能動態（Active Voice）と受動態（Passive Voice）と呼ばれている。しかし、約 8,000 年前の印欧語族には、もうひとつの態である中動態が存在した。

例えば、「眠る」という行為は、自分の意志（能動態）では果たせない。明日は大事な会議が朝からあるので、早く眠ろうと思えば思うほど眠れないもの。また眠らされる（受動態）という行為も不自然である。眠るという行為は、自らの意志を超越した状態なのである。眠っている状態の中に自分がある、とでも表現しようか、そこには能動態も受動態も入り込めない“中動態の世界”があるのである。

今回は、現在は消滅したとされる“中動態”が存在した世界を探ってみる。この世界を理解するには、今はなじみの、「私が何とかしなければ」「誰かが何とかしてくれる」といった、「する—される」に囚われた思いから解放されなければならない。自分の意志（能動態）をはるかに離れた世界に身を置いたとき、見えてくる景色はどのようなものであろうか。

感動は中動態

感動とは、名の通り、感じて動くことである。理性で動く「理動」というコトバは存在しない。感動というコトバは現在、きれいなものを見たり、聞いたりしたときに使う。しかし語源からみると、五感で感じて即行動することが感動である。



中動態は、古代インドのサンスクリット語では、「反射態」とも呼ばれた。つまり、よけいな頭の働きが入る前に、感じて行動することを意味したものである。書くという行為も中動態の世界である。感じたままをまずコトバに落とす。その後の推敲・編集はゆっくりと頭を使う（映画『小説家を見つけたら』より）。

以前真国寺で働いていた中国人留学生の行動が、中動態の世界を如実に物語る。5月の週末、老夫婦の車がアクセルとブレーキの踏み間違いで、寺の下を流れる牛ヶ首用水に転落した。彼はとっさに走り、飛び込み、危機一髪でこの老夫婦を救助した。正気に返った彼は、震える身体で言った。

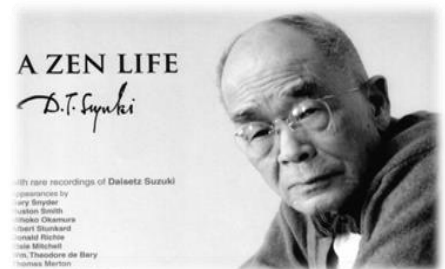
「僕はまったくのカナツチで泳げなかったのに、。水深 2m 近くあるこの川で、下手をすれば、彼も溺れ死んでいたかもしれない。」

反射的にとった彼の行動は、まさに感動（中動態）だった。理性や意志が入るまえにとった彼の行為は、二人の人命を救い、富山中央警察署より人命救助の表彰を受けるに至った。

中動態という世界は、かくも感動的に私たちの面前に展開される。人間が本来の自然体で行動することを表現した中動態が、今の世で使われなくなったのは何故か。失われた中動態を探ることで、現在を顧み、これからの新しい世界を創ってゆく時の手がかりになりそうな気がする。

<事例 DVD 等>

國分紘一郎著「中動態の世界」意志と責任の考古学 医学書院
米映画「小説家を見つけたら」／書くときは心をつかい、編集は頭を使う
WBC2013年、日本 vs. 台湾戦、9回2アウトで、鳥谷が走る
泳げない中国留学生・劉くんが川へはいる／反射的に動く 2007年
考える以前の行動／ゴーンの声／主客未分／自我超越／自己実現
赤ちゃんの原始歩行／意志が表れる前の行為
ボクサー村田諒太の中動態的な行動／問う自分から、問われる自分へ
オバマ大統領の広島スピーチ／哀悼の念がある、2016年
中動態の人・鈴木大拙と岡本美穂子／こころの時代より 2012年
サイモンとガーファンクル「The Sound Of Silence」中動態の歌



仏教学者・鈴木大拙